

南丹波の古代末期瓦生産の一様相

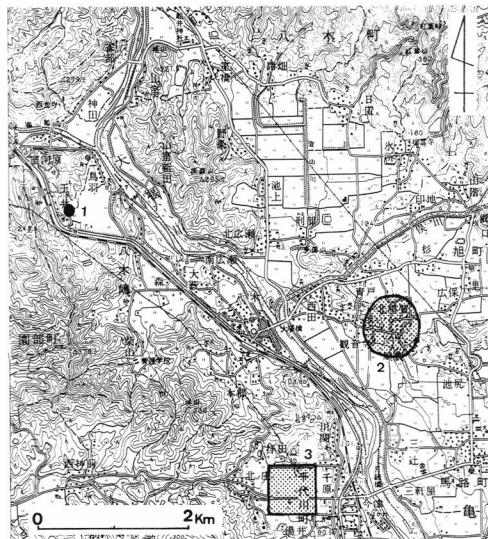
森 下 衛

1 はじめに

1973年、船井郡八木町字鳥羽の丘陵において、1基の瓦窯が発見された。所在地から鳥羽瓦窯と名付けられたが、造成工事中の不時発見であったことから、急遽、発掘調査が行われた。その結果、窯跡は半地下式有階有段の登窯であることが判明し、窯体内からは軒丸瓦1点、平瓦片4点が出土した。調査者は、本瓦窯の年代を、主に出土した平瓦に認められる製作手法的特徴や窯体構造などから奈良時代後期と推定した。ただし、製品の供給先については、当時、当地域において奈良時代後期段階の諸遺跡の様相が明確でなかったこともあり、特定が困難であった。なお、その後、京都府教育委員会発行の『京都府遺跡地図』¹では、当瓦窯跡の年代について、出土している軒丸瓦の瓦当文様や窯体構造などから、その時期を白鳳期のものとしている²。

遺跡発見から約17年を経た今日、当地域では、奈良時代頃に瓦を使用していたと考えられる遺跡の様相が徐々に明らかになってきた。とはいうものの、鳥羽瓦窯出土資料に関しては、類似資料がいまだに確認されず、その供給先に関して不明な点を多く残しているのが現状である。さらに、出土遺物は周辺の水田部から出土したとされるあと数点の平瓦とともに現在、八木町郷土資料室に保管されているが、推測されているその操業時期などについて、若干疑問な資料が混在しているように思えた。そこで、本稿では、これらの資料を改めて整理し、簡単な検討を行うことにしたい。

なお、資料の実見に際しては、八木町教育委員会秦正音、中川昇両氏の協力を得た。記して感謝いたします。



第1図 鳥羽瓦窯位置図(1/100,000)

1. 鳥羽瓦窯
2. 屋賀国府推定地
3. 千代川国府推定地

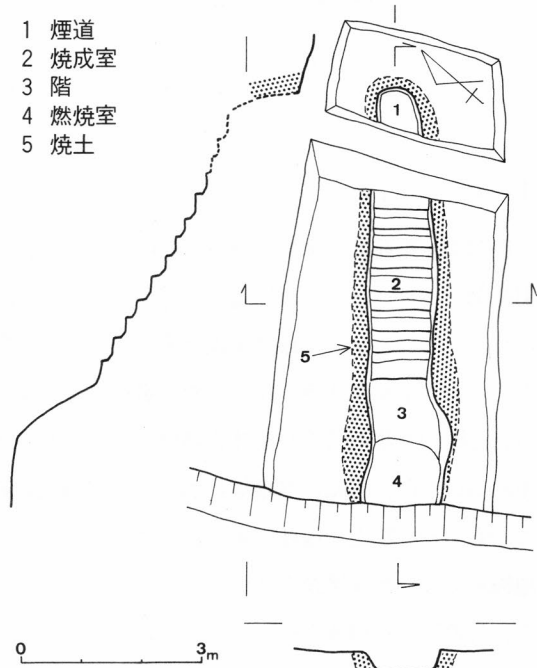
2 遺跡の概要

京都府船井郡八木町鳥羽の地は、亀岡盆地の北方、大堰川と園部川の合流点付近に位置する。当地は、こういった地理的条件から古くより水運を背景として発展した。特に保津峡が開かれた江戸時代以降は、両河川を下ってきた物資を京都へ運ぶための中継地として重要な位置を占めたようである³。実際、こういった土地柄が古代まで遡り得るかどうかは不明である。しかし、両河川流域に産する物資を当時丹波国の中心地であった亀岡盆地の各所へ運ぶ際に、その中継地としての役割を担っていた可能性は少なくないとする。

今回、対象とする鳥羽瓦窯は、この鳥羽の町並から南西約500mの丘陵西側斜面に立地する。本瓦窯が当地に営まれた背景の一つとして、製品の輸送という意味で近隣に上記のような水運に適した土地が控えていたことは重要な意味をもっていたと思われる。

さて、報告書によると⁴、瓦窯は、1基のみが確認されたものである。ただし、調査範囲が極めて限られていたことなどから、確実に単独で営まれたものかどうかははっきりとしない。地形などからみてそう多くの窯が築かれていたとは考えられないものの、数基程度の窯が分布していた可能性は高い。瓦窯の構造は、丘陵斜面を利用して築かれた半地下式の有階有段登窯である。遺存長約8.7m、幅約0.9m、斜面の傾斜角は約30°を測る。詳細は報告書に譲るが、ここで特に留意すべきことは、窯体の構造が半地下の有階有段登窯であること、遺構の遺存状況から本瓦窯が幾度も使用されたものでなく、比較的短期間で放棄されたものと考えられる点の2点である。

3 出土資料



第2図 鳥羽瓦窯実測図
(注1文献より作図)

(1) 資料の紹介

資料は、その後に周辺で採取されたものを含め総数で8点が保管されている。軒丸瓦が1点、平瓦片7点である。なお、軒丸瓦は先の発掘調査で出土したものと確認されるが、平瓦については、その後周辺の水田から出土したものも含めて保管されており、現在では、いずれが調査によって出土したものかについては明確でない。

軒丸瓦(第3図1) 素弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房には大粒の蓮子を1個配し、花卉は華蕾状をなす。弁間文は大きくのび、花卉の外側でそれぞれが連結し圏線状をなす。周縁は直立し、幅の狭い素文縁(幅約0.7cm)である。瓦当裏面は剥離しており、その整形技法は不明である。ただ、周縁は丁寧なナデによって仕上げられていることが観察できる。瓦当の直径は16.5cmを測る。焼成はやや甘く、軟質で、淡黄灰色を呈する。

平瓦 平瓦は、いずれも破片で、凸面に縄叩きを施すものだが、その縄目の粗密等から大きく2種類に分けることができる。以下、これを平瓦Ⅰ・Ⅱとして報告する。

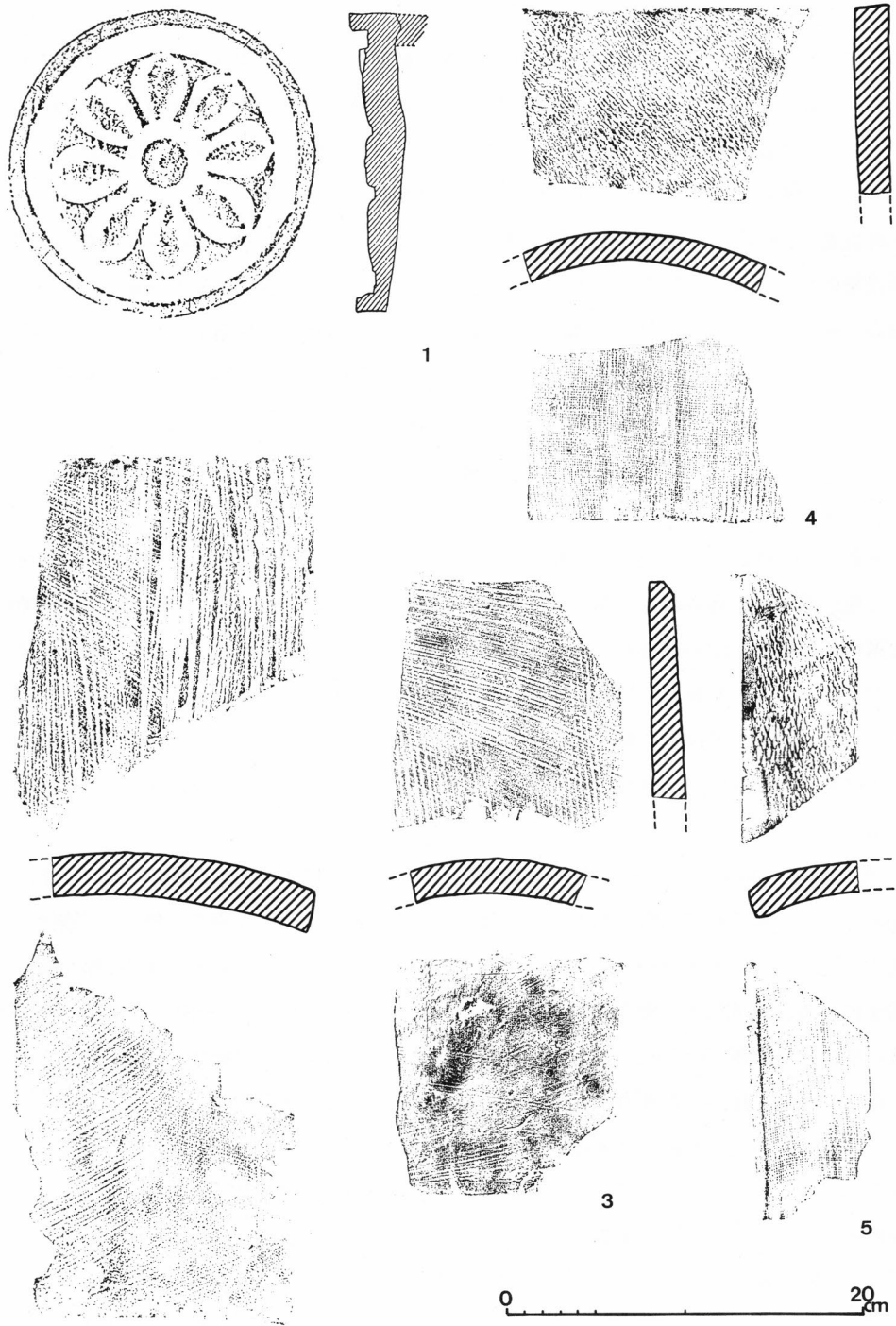
平瓦Ⅰ(第3図2・3)は、破片数で6点ある。うち2点を図示した。凸面に縦方向の極めて粗い縄叩きが施され、凹面には目の粗い布目が認められる。また、凹・凸両面に明瞭な糸切りの痕跡が認められる。端面・側面とも粗いナデで仕上げられ、面取り等を行われておらず、叩き・布目とも端面・側面の端まで及んでいるものがほとんどである。ただ、1点のみ、端面の凹面側に幅1cm程度の面取りを行うものを認めた(3)。厚さ約2.0cm。胎土は精良、焼成はやや軟質で乳灰色ないし暗灰色を呈する。一枚造りによるものの可能性が高い。

平瓦Ⅱ(第3図4・5)は破片数で3点ある。うち2点を図示した。凸面には斜め方向の縄叩きが密に施され、凹面に認められる布目も比較的密である。1点のみ側面の調整が確認でき、これには凹・凸両面から幅約0.7cm程度の面取りが観察される。厚さ約2.0cm。胎土は精良、焼成はやや軟質で淡黄褐色ないしは乳灰色を呈する。凹面には幅約2cm程度の桶椀板の痕跡状の凹凸が認められ、桶巻き造りによるものの可能性が高い。なお、明らかに平瓦Ⅰに比べ平瓦Ⅱのほうが丁寧に造られていることが判明する。

このほか、周辺の水田では現在も平瓦片が採取される。その内容としては、圧倒的に平瓦Ⅰが多いが、中には須恵質に良好に焼成されたものや、焼きが甘く軟質で乳灰色ないし暗灰色を呈するものが混在する。

(2) 資料の検討

続いて、主にこれらの製作年代について検討を加えてみることにしたい。ただし、本資料には、明確にこれを把握する上で決め手となるような土器資料がない。このため、周辺



2
第3図 鳥羽瓦窯出土瓦実測図及び拓影

の類似資料との対比の中で検討を行うこととなる。

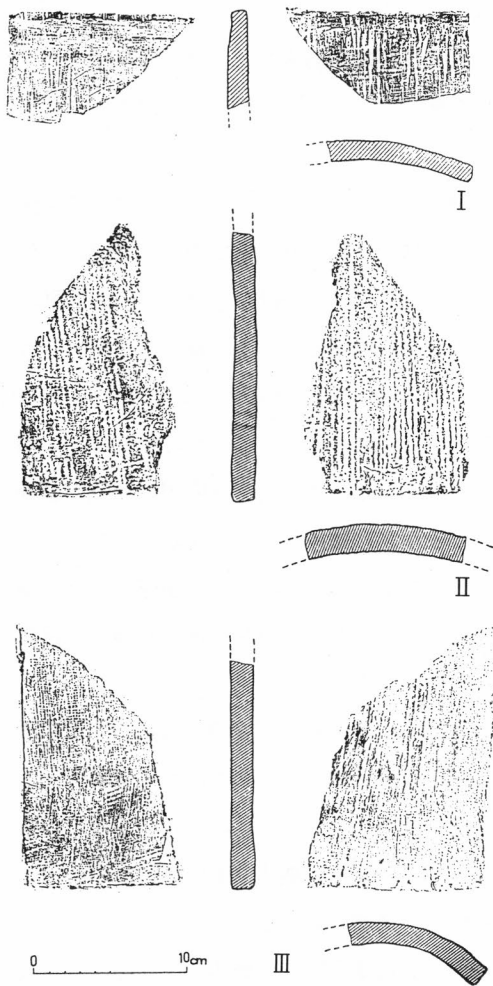
まず、軒丸瓦についてであるが、やはりその瓦当文様は飛鳥末ないしは白鳳様式をもつものといえる。しかし、類似資料がなく、十分な検討ができない。そこで、以下、平瓦について、若干、考えてみることにしたい。

一般に、平瓦の凸面に施される叩きに縄目が使用されることが主流になるのは、8世紀以降である。南丹波地域でこの時期の寺院跡などの様相をみても、白鳳期(7世紀後半)創建と考えられる桑寺廃寺⁵(亀岡市千代川町)や観音芝廃寺⁶(亀岡市篠町)では、その創建期に使用された平瓦は、格子叩きを施したものであることが判明している。縄叩きを使用されるのは、7世紀末～8世紀初頭頃に創建されたのではないかと思われる与能廃寺⁷(亀岡市曾我部町)以降である。与能廃寺では、その創建時に使用されたとされる藤原宮式の偏向唐草文軒平瓦の顎部及び平瓦部に縄叩きが施されている。また、京北町周山瓦窯⁸の調査成果でも、縄叩きは8世紀初頭頃に至ってそれが使用され始めることが確認されている。そしてこれ以後、上記各寺院の補修時、奈良時代後半期の国分僧寺・尼寺⁹創建時やその補修(平安時代)に際して縄叩きの平瓦が使用され続ける。また、平安時代後期段階にも篠窯跡群(亀岡市)などで縄叩きの平瓦が製作された。

ただし、これらにみる奈良時代～平安時代の縄叩きにも大まかな変遷が指摘しうる。まず、最も古い資料として、またそれが良好に確認できるものとしての周山瓦窯資料では、縄叩きは大きく2種類に分けられ、最初に出現する縄叩きⅠは、これに先行する他の格子叩きと同じ円弧を描くように密に施されている。また、後出の縄叩きⅡは側縁に平行に、すなわち縦位に密に施されている。なお、いずれも、桶巻き造りによることが確認されている。以後、奈良時代前半期(8世紀初め)と推測される桑寺廃寺の縄叩き平瓦や奈良時代中葉(8世紀中頃)と考えられている観音芝廃寺の縄叩き平瓦では、一枚造りとなるが、叩きについてはやや縄目が粗になる傾向があるものの、その形状は基本的に周山瓦窯の縄叩きⅡと近似するようである。そして、奈良時代後半期に位置づけうる丹波国分僧寺・尼寺出土の平瓦の縄叩きもほぼ同様の傾向が指摘しうる。これに比べて、平安時代後期～末段階の平瓦に認めうる縄叩きは、明らかな違いがある。というのも、縄の太さ、密度、さらに叩く密度といった面のどれをとっても非常に粗くなり、一見、全く異質な感を受ける。

以上が当地域における平瓦に施された縄叩きの変遷の概略である。

これらの中で鳥羽瓦窯の平瓦資料のおよその時期を検討すると、平瓦Ⅰとしたものは平安時代後期～末期のものに近く、平瓦Ⅱは斜めに叩いている状況を円弧を描くように叩いていること、また凹面の凹凸を桶巻き造りの痕跡と考えれば8世紀初頭の周山瓦窯例に近い点が指摘しうる。



第4図 園部窯跡群出土平瓦
(注10b文献より)

特に、平瓦Ⅰとした資料に関しては、より近似した資料として園部窯跡群内で発見された瓦窯跡出土資料をあげることができる。¹⁰園部窯跡群内発見の瓦窯とは、その西端近くの壺ノ谷支群内において発見されたもので、採取されている平瓦は、その製作手法から3種類に分けることができ平瓦Ⅰ～Ⅲとして報告されている。この内、平瓦Ⅲとして報告されているものは凸面に粗い縄叩きが施され、凹凸両面に明瞭な糸切り痕を残し、その状況は鳥羽瓦窯資料の平瓦Ⅰに極めて近似する。園部窯の資料は、共に発見された須恵器資料やそこに認められた軒平瓦の製作技法などからおよそ12世紀前半から後半頃の範囲でとらえるものと考えられ、¹¹その類似性から鳥羽瓦窯平瓦Ⅰの年代もこれに近い時期を想定することができるものと思われる。

これに対し、鳥羽瓦窯平瓦Ⅱは今のところ類似資料は周山瓦窯の縄叩きⅠの平瓦のみである。しかし、その調整

の差異等からみて、鳥羽瓦窯平瓦Ⅰとは時期を異にする可能性が高く、やはり、周山瓦窯資料と同様に8世紀初頭頃のものとするのが最も妥当なようである。

以上、現在、鳥羽瓦窯出土資料として保管されているものには、全く時期の異なった平瓦が混在していることが明らかとなった。しかも、出土している両平瓦とも焼成がやや甘く、消費遺跡に伴う資料とは考えられない。両者の混入は、時期の異なる瓦窯が近接して存在していたためによるものとすべきだろう。すなわち、確認されている鳥羽瓦窯は、上記の平瓦の示す8世紀初頭ないしは、平安時代後半～末(12世紀代)のいずれかの時期に営まれたものであり、残るいずれかの時期の平瓦は、近接して営まれた別の瓦窯で生産されたものが混入したものと考えられるのである。

では、確認されている瓦窯はどの時期に営まれたのであろうか。この場合、窯体構造や出土している軒丸瓦の瓦当文様が、その造営時期を探る上で重要な手掛かりとなろう。上記のように鳥羽瓦窯は、半地下式有階有段登窯である。一般にこういったタイプの窯体構造のものは、飛鳥～奈良時代に主流とされる。また、軒丸瓦もその瓦当文様が飛鳥～白鳳期の特徴を備えている点は既に述べた。これらからすれば、確認されている窯跡は、平瓦Ⅱに想定される時期、すなわち8世紀初頭頃に営まれたものとなる。そして、圧倒的多数を占める平瓦Ⅰの示す平安時代後期段階の窯は近辺に未発見で埋没しているか、既に削平されてしまっている可能性が高いと判断されるのである。

4 ま と め

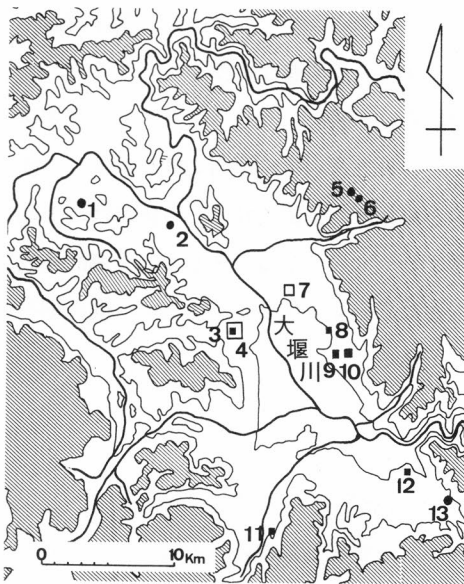
以上、鳥羽瓦窯出土資料を検討した結果、下記の2点が提示できる。

①確認されている窯跡自体は、従来の認識どおり、8世紀初頭頃のものであり、これに伴う資料として、軒丸瓦、平瓦Ⅱがあげられる。

②周辺には、さらに平瓦Ⅰの示す平安時代後期段階の窯跡が存在していた可能性が高い。このうち、確認されている本来の鳥羽瓦窯の示す時期、8世紀初頭頃については、近辺での出土資料に類似した軒丸瓦は発見されておらず、その供給先については定かでない。また、これと対比しうるような同時期の瓦窯も近辺にはほとんど確認されていない。このため、その具体的な位置づけについては、今後の調査・研究に委ねざるをえない¹²。

ここでは、今回新たに抽出しえた未発見の瓦窯、すなわち平安時代後期段階の瓦生産について少しその位置づけ等について述べ、まとめとしたい。

従来、南丹波地域における平安後期段階の瓦生産といえば、亀岡市篠窯跡群がその代名詞といえた¹³。その製品は、平安宮、六勝寺などへ供給されたほか、瓦窯の近くに営まれた観音芝麩寺をはじめ、丹波国分僧寺・尼寺や、出雲神社(亀岡市千歳町)など、南丹波地域内の各所でもその製品が出土している。ここでの瓦生産は、現在の亀岡市篠町大字王子付近一帯を中心に行われていた。鶺鴒川の北岸一帯に、現在までに4基の瓦窯が確認されているが、消費地での出土状況などを考慮するとさらに多くの窯が未発見で埋没している可能性が高い。生産されていた瓦には、半截花文・均整唐草文を代表とする瓦当文様の軒平瓦をはじめ、多くの軒丸瓦、丸・平瓦が、いわゆる丹波系として抽出される特徴的な製作手法によって大量に生産されていたことが確認されている。篠窯跡における瓦生産の推移についてのべると、これに先行する須恵器生産が衰退する11世紀前半頃、平安京での瓦の需要に応える形でその生産が開始され、播磨をはじめとする他の窯業生産地での瓦生産がピークを迎える12世紀中葉～後半頃に衰退・消滅するといわれている。



第5図 南丹波地域寺院跡・瓦窯分布図

- | | |
|-------------------|------------|
| 1. 園部窯跡群 | 2. 鳥羽瓦窯 |
| 3. 丹波国府推定地(千代川遺跡) | |
| 4. 桑寺廃寺 | 5. 鎌谷瓦窯 |
| 6. 殿若瓦窯 | 7. 屋賀国府推定地 |
| 8. 三日市廃寺 | 9. 丹波国分尼寺 |
| 10. 丹波国分僧寺 | 11. 与能廃寺 |
| 12. 観音芝廃寺 | 13. 篠窯跡群 |

これに対し、南丹波地域では、近年、篠窯跡群以外にも平安時代後期段階に瓦生産が行われていたことが徐々にわかってきた。その一つが、先に紹介した園部窯跡群内における瓦生産である。詳細については、既に記述したので重複を避けるが、ここでは、播磨方面の影響をうけた製作手法による平瓦と、そうでない粗い縄叩きの平瓦が造られていたことも判明している。ただ、その供給先については明らかでない。また、園部窯跡群内での瓦生産自体も、確認された窯跡が出土資料から推察される12世紀頃に単発的に瓦生産を行ったのか、もしくはこれより古い段階から継続して生産し続けていたのか判然としない。ただ、散布する資料の量などからみてもさほど長期的かつ大規模な瓦生産とは考えられない。

さらに、八木町字神吉小字鎌谷においてもやはりこの頃の瓦窯跡が存在する。資料数が少ないため詳細は不明であるが、圃場整備に伴って採取された資料(2点の平瓦片)をみる限り、平安時代後期頃のものだと判断される。資料は、縄叩きを施したものと、叩きをナデ消し須恵質に硬く焼成したものの2種類が認められ、その製作手法の様相は園部窯跡群に近い。遺物の散布状況は極めて限られた範囲であり、その生産規模もやはり大規模なものとは考えられず、時期的にも長期にわたって生産が続けられたとは思われない。

以上、これら生産遺跡についてはいまだ不明な点も多いが、今回、明らかになった鳥羽瓦窯の平安時代後期段階における瓦生産は、こういった篠以外の瓦生産遺跡の一例としてとらえることができる。すなわち、当地域では、篠以外に、今回紹介した鳥羽瓦窯を含め、少なくとも3か所の窯場においてこれとほぼ同時期に瓦生産が行われていた状況が明らかとなってきたわけである。無論、現在確認されている生産体制・生産規模という意味で、篠が当地域での平安後期段階の瓦生産における中心的立場にあることはかわりがない。しかしその中で、他の窯場の様相において、いくつかの注目すべき点が認められることも事実であり、今後、南丹波地域の古代末期の瓦生産の動向を考える上で重要な意味をもつ

のと評価できるだろう。今、思い付くままにその幾つかを列記してみる。

まず、最も注目される点として、その製品の供給先の問題があげられる。当然、篠と同じく平安京や六勝寺などへ製品を供給した可能性が考えられるだろう。しかし、篠の製品の分布からここ南丹波地域でも僅かながら需要があったことが確認できる上に、これら3か所の窯場での瓦生産においては、篠とは異なった様相も指摘しうる。篠に比べ生産体制、製品の内容に格段の差異が認められる点である。周辺に散布する遺物量などからみて、篠に比べ、それらの生産規模が比較的小さかったらしいことは既に述べた。さらに、この3遺跡から出土する瓦類には、篠のように軒瓦、平・丸瓦すべてがそろっているわけではなく、平瓦が圧倒的に多く、園部窯跡資料に僅かに軒平瓦が含まれるといった状況を指摘しうるのである。このことは、これらが篠のような大規模な消費地を対象とした生産地ではなく、どちらかという小規模な需要に応えるため、短期的に営まれたことを示しているようにも思えるのである。いずれにしても、各窯跡についてはいまだ発掘調査はなされておらず、その製品が消費地としての寺院跡等で確認されているわけでもない。こういった状況では、その結論は今後の調査研究に委ねるべきほかないだろう。ただ、やはり今後、ここ南丹波地域内での何らかの瓦の需要という視点は重要ではないかと判断している¹⁴。

また、それぞれの瓦窯跡をみていくと、そのいずれにおいても近辺で前時代に窯業生産が行われていたことが確認される点も重要である。園部窯跡群で古墳時代から須恵器生産が継続されていたことは周知のとおりであるが、鎌谷窯においては鳥羽瓦窯と同様、白鳳期に瓦生産が行われていたことが近年確認された¹⁵。これらのことは、需要という面に加え、生産する側にもそのための下地が用意されていたことを示している。

さらに、園部窯跡群中にみる播磨系統の技術の存在があげられる。これは、当地域で須恵器・瓦生産に従事した工人の移動、交流といった面を考える上で貴重な資料となろう。以上、問題点の提示に終始したが、その具体像の解明については今後の調査研究に期することとし、とりあえずここでは、以下の点を確認し筆を置きたい。

①鳥羽瓦窯跡での平安後期段階の瓦生産は、従来注目されてきた篠窯跡群での瓦生産とは異なった性質を帯びる可能性がある。しかも、こういった瓦生産が南丹波地域内に幾つか存在したことを示す資料の一つとして、貴重な資料ととらえることができる。

②また、これらは単に瓦生産という面にとどまらず、技術系統などの面で、古代末期における南丹波地域の窯業生産の動向を考える上でも重要な資料といえるであろう。

(もりした・まもる=京都府教育庁指導部文化財保護課)

- 1 安藤信策「鳥羽瓦窯の発掘調査」(『京都考古』第1号 京都考古刊行会) 1973
- 2 『京都府遺跡地図』第3冊 京都府教育委員会 1986
- 3 『京都府の地名』 平凡社 1981
- 4 前掲注1に同じ
- 5 森下衛ほか「千代川6・7次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第14冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984
- 6 樋口隆久「観音芝廩寺発掘調査報告」(『亀岡市文化財調査報告書』第20冊 亀岡市教育委員会) 1988
- 7 森下衛「与能廩寺採取の古瓦」(『京都府埋蔵文化財情報』第13号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 8 『丹波周山窯址』京都大学考古学研究室 1980
- 9 丹波国分僧寺跡の平瓦については、亀岡市文化資料館で実見。他に以下の文献を参考とした。
 - a 『亀岡市史』上巻 亀岡市 1960
 - b 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」(『古代研究』第13・14合併号 元興寺古文化研究所) 1978
- 10
 - a 山田邦和「丹波の須恵器生産覚書」(『考古学と地域文化 同志社大学考古学シリーズ』Ⅲ 同志社大学考古学シリーズ刊行会) 1987
 - b 森下衛「園部窯跡群採取の古瓦」(『京都府埋蔵文化財情報』第12号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984
- 11 前掲注10a文献では、伴出した須恵器の年代観から出土瓦の年代を12世紀後半としている。また、同b文献では伴出した軒平瓦の特徴から12世紀前半と考えている。発掘資料ではなく正確な年代については不明だが、少なくとも12世紀代の資料としうることは間違いないだろう。
- 12 このことに関して、近年、八木町神吉字殿若において白鳳期の瓦窯跡(殿若瓦窯)が発見された点を付け加えておきたい。採取されている資料は、凸面に斜格子叩きを施した桶巻き造りによる平瓦で、若干鳥羽瓦窯よりも時期的に遡りうるものかもしれないが、およそ7世紀末頃のものと思われ、両者は比較的近似した時期のものとして判断される。現在のところ、ここもその供給先については全く明かでない。ただ、近くを流れる三俣川を下ってくると八木町屋賀に至るが、そこは、鳥羽瓦窯から大堰川を下って直ぐのところであり、なおかつここからは水・陸両交通路を使えば亀岡盆地の各所へ製品を移動できる交通の要衝でもある。こういった状況をみると、両者とも水上交通を利用した製品の移送という視点が重要ではないかと思える。水上交通を利用すれば、比較的遠隔地へも製品の移送が容易となるだろう。
- 13 篠窯跡群の様相については、前掲注9a・b文献のほか以下を参考とした。

伊野近富「丹波篠窯の終焉」(『中世土器の基礎研究』Ⅲ 中世土器研究会) 1989
- 14 漠然と、南丹波地域内での瓦の需要と考えたが、実際の具体例としては、国分僧寺・尼寺などの寺院跡や、丹波国府跡での使用を考えている。国分僧寺・尼寺については、平瓦等の整理が進んでおらず、今後篠産以外の平安時代後期頃の瓦類が検出される可能性もある。また、丹波国府跡での瓦の使用については、従来の説によると国府は奈良時代に亀岡市千代川町に造営されたが、平安時代後期頃に八木町屋賀の地に移動したとされる。時期的に細かな検討ができる段階ではないが、いずれの瓦窯跡も水上交通を利用すれば屋賀へは容易に製品を移送しうる上に、現在推測される国府の移転時期に各窯跡の操業時期が重複してくる可能性もある。今後の調査研究の進展によっては、両者の関連が現実のものとなるかもしれない。
- 15 前掲注13に同じ。